



2012年12月より米国アイオワ州 University of Iowa, Molecular Otolaryngology Research Lab に留学しております。このラボのボス, Richard Smith 先生が当教室の宇佐美教授と以前より共同研究を行っていたこともあり, 宇佐美教授のメール1通で私の留学が決まりました。お二人とも難聴の遺伝子研究の米日のトップであり, お粗末なことがあってはこの業界で生きて行けないという覚悟の旅立ちでした。そんな不安いっぱいまで到着したここアイオワシティーは米国の中西部, のどかな地域であるアイオワ州の2番目の都市, オールドキャピタルという記念碑的な建物が中心にあり, 大学の街で学生が多いです。日本の真ん中, 我らが松本と同じ条件です。治安の良さは全米屈指で女子がひとりで朝夕にジョギングする姿をよく見かけます。またリスやウサギも駆け回っています。英語環境という大きな変化はありましたが, 親切な人が多く, 馴染みやすいと感じました。

当地では次世代シーケンサーを使った難聴の遺伝子解析に関する研究を行っております。ラボの建物は非常にきれいでモダン, 内外装もトイレ以外すべてガラス張り。私のベンチとデスクで一列2m以上の広大なスペース, そこからボスの部屋が丸見えです。当然あちらからも見えますので, 帰宅のタイミングは常に気にします。他のスタッフも同様で, 夕方ボスが席を外した瞬間に, 「Now!」と一緒にラボを脱出する時は, どこも同じ価値観だな, と嬉しくなります。現在, 遺伝子解析の分野はBioinformaticsの重要性が増しており, 大学に専門の部署があります。ミーティングの時は各個人のMac bookがずらっとならんで壮観です。遺伝子解析のソフトウェアはいろいろありますが, ここではそれらを根底から作り上げたり, 改良し

たりできる人材が揃っています。都度に高価なソフトやシステムを業者に依頼するよりも, ニーズを理解して作れる人材を育てる重要性を感じました。Bioinformaticianの方々は, 遺伝子をまさに情報として見ており, その視点の新鮮さにも驚きます。全員Mac愛好家の方々に, 日本から持参の私のMacを使って教えてもらえます。ただ, 解析の理論的なことになると, 非常に高度で難解, 医者が太刀打ちできるものではありません。

現在, 実働開始して6カ月目に入ったところです。米国で研究留学, と聞くとカッコイイ印象を受けていました。諸先輩方はスマートにやってこられたのかもかもしれませんが, こと, 私自身はそんなに恰好のつくものではなく, 大変な毎日です。先日もやっとの思いでリサーチアップデートのプレゼンをしたのですが, 10歳以上若い子たちに「Good job, Hide!」と言われて, ちょっと幸せを感じるくらいです。ちょうど, まだ慣れないけれど頑張っている研修医がプレゼンで上手くいったときの感じでしょうか。日本にいる時は多少, 肩で風を切ったような風情の私でしたが, ここ米国では明るく頑張るただの40歳手前です。また, ひとりで黙々と実験して行くというワケではありませんで, 他の部署のスタッフと機械の使用, スケジュールなど密に打ち合わせないといけません。言葉の壁は厚く高く40歳手前に立ちはだかります。トラブルが生じた時などはなおさらです。しかし伊達に年とっているわけではないので, 二重三重に予防策を張り巡らせておくことには長けております。先日もこうした予防策が功を奏し, あらぬ疑いをかけられずに済みました。そんな時は若い子たちも「cool!」と讃えてくれます。年とってからの留学でも良い面を出すことができると信じています。必死になって生活する, このような機会を与えていただかなければ, 世界の何たるかを知らないままでした。英語論文や国際学会だけでは到底知り得ない世界が, ここには広がっています。何をすることも苦しく, そして充実の日々です。最後に, この留学を日本から支えてくれている宇佐美教授はじめ耳鼻科教室スタッフの皆様, 留学に際し米国生活でのアドバイスを頂戴した各診療科の先生方, また一緒についてきてくれている私の家族に, この場をお借りして感謝いたします。さて来週, サンフランシスコで学会発表です。ラボの同僚, Kevinとホテル相部屋, 毎晩partyと彼は言っています。頑張ります。

(2013年6月)

(信州大学医学部耳鼻咽喉科学講座所属)